

不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援の工夫

～アセスメントに基づいた寄り添う支援を通して～

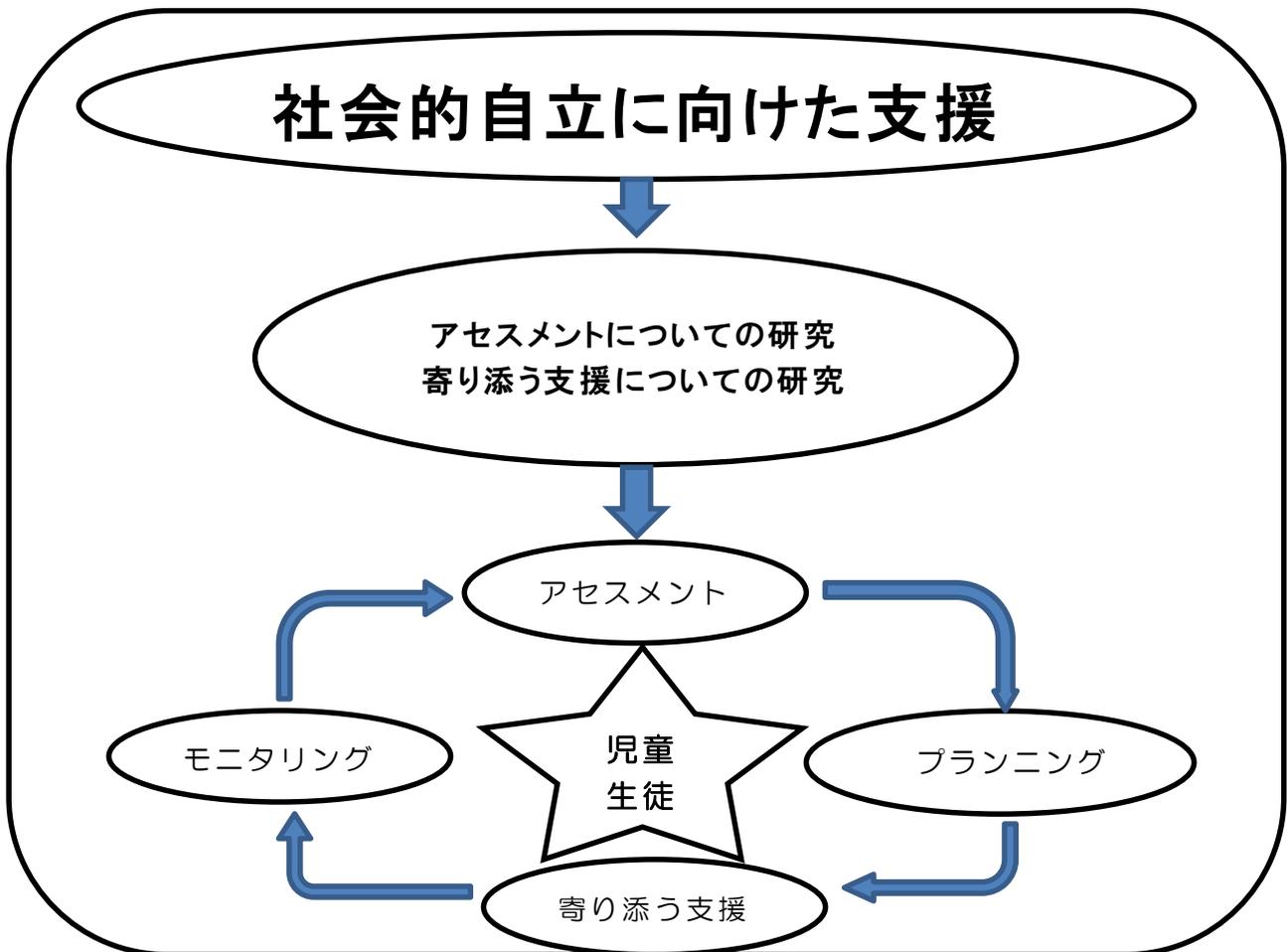
那覇市立松島小学校教諭 與那城 篤

〈研究の概要〉

共感的理解と受容の姿勢を持つ工夫を行くことで、不登校児童生徒の児童理解を深めることができると考える。

学校・家庭・関係機関の連携を強化する手立てを考察・実践し、情報を丁寧に集めてアセスメントをし、効果的なプランニングから寄り添う支援を行い、支援の成果と課題を分析するモニタリングを行った。そこから更にアセスメントに繋げる事で、児童生徒が不登校になった原因を究明し、改善を図ることで社会的自立を促進することができた。

〈研究のイメージ〉



I	テーマ設定の理由	65
II	研究目標	66
III	研究構想図	66
IV	研究内容	66
	1 アセスメントについて	
	(1) 包括的アセスメント	
	(2) アセスメントシートの活用	
	(3) アセスメントにおける着眼点	
	(4) 情報の意味を読み取る	
	2 寄り添う支援について	
	(1) 信頼関係の確立に向けた支援員の姿勢	
	(2) ななめの関係性	
	(3) ケースに合わせたスモールステップ支援	
V	研究実践	69
	1 アセスメント（生物的側面、心理的側面、社会的側面についての情報収集）	
	(1) 学校調整：アセスメントシートの活用	
	(2) 学校支援計画の活用	
	(3) インテーク（受理面接）の実施	
	(4) 支援報告	
	(5) 会議の持ち方	
	(6) プチアセスメント	
	2 寄り添う支援の工夫（アセスメント→プランニング→モデリング）	
	ケース（1）中学生女子（遊び非行系不登校）	
	ケース（2）中学生男子（遊び非行系不登校）	
VI	実践を通しての考察	71
VII	成果と課題	72
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献・引用文献》

不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援の工夫

～アセスメントに基づいた寄り添う支援を通して～

那覇市立松島小学校教諭 與那城 篤

I テーマ設定の理由

文部科学省は「不登校」を連続又は断続して年間 30 日以上欠席し、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況である（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）」と定義している。平成 27 年に発足した「不登校に関する調査研究協力者会議」の最終報告によると、「不登校の要因や背景として、本人・家庭・学校に関わる様々な要因が複雑に絡み合っている場合が多く、その背後には、社会における「学びの場」としての学校の相対的な位置付けの低下、学校に対する保護者・児童自身の意識の変化等、社会全体の変化の影響が少なからず存在するとしている。」また、その対応策として、「不登校児童生徒のみならず、その保護者等にも共感する姿勢やこれからの支援を共に考える姿勢を示すことで信頼関係を構築するとともに、よく話し合うことで支援のニーズを的確に把握し、個々の児童生徒の要因に応じた効果的な支援策を講じることが必要である。」としている。

本県の小中学校不登校児童生徒数については平成 29 年度の不登校の現状として、1000 人当たりの割合が全国平均 14.7 人に対して 17.3 人となり、小学校は全国ワースト 2 で、中学校は全国ワースト 5 となっており、今後中学校での増加が懸念されている。その対策としては、SSW（スクールソーシャルワーカー）の処遇改善を図り、保護者支援や小中連携を担える優秀な人材を多く採用する等、より効果性の高い取組が急務であるとしている。

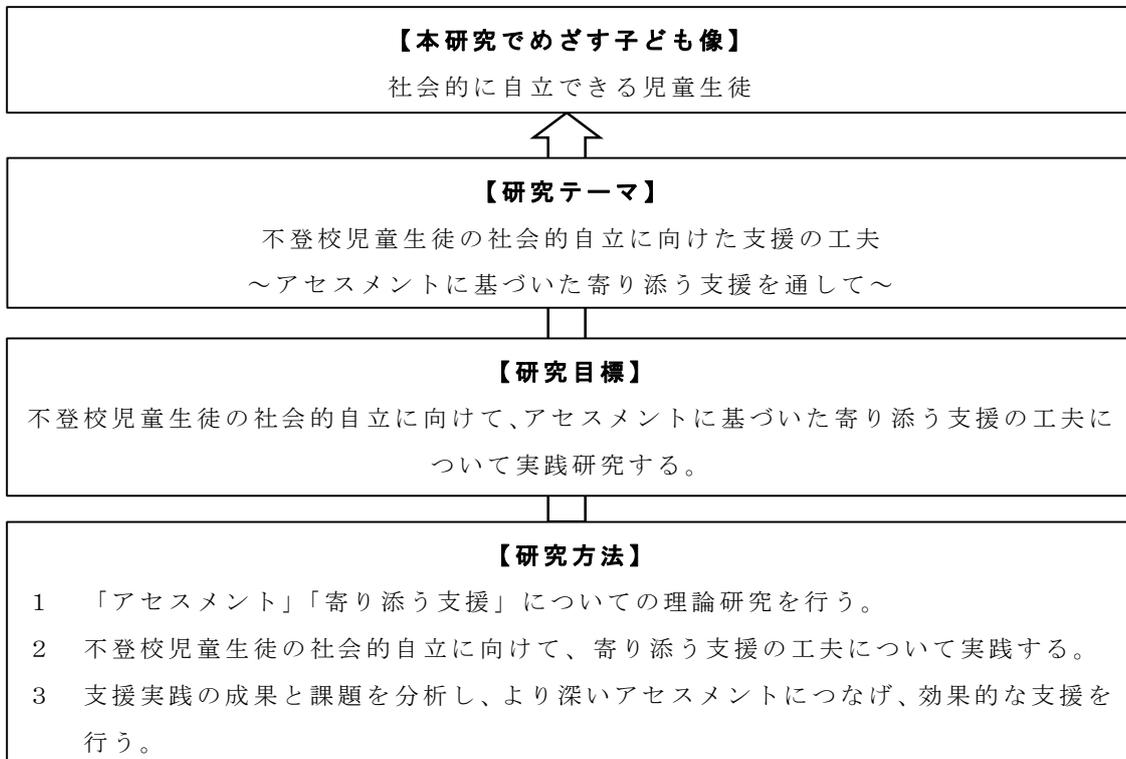
平成 24 年『社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力』について」文部科学省からの提言によると、「移行に必要な力」の内容として「①基礎的・基本的な知識技能」「②基礎的汎用的能力」「③論理的思考、創造力」を挙げている。さらに、「②基礎的・汎用的能力」を「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応力」「キャリアプランニング能力」に分けている。本自立支援教室においてはその 4 領域を育む支援を行う事で社会的自立を促す。遊び・非行系、長期欠席等による不登校児童生徒が不登校になる要因や背景として、学校生活への不安、担任や級友との人間関係からの不安、遊び・非行等の怠学、家庭環境の複雑さ、特別な支援を要する児童生徒の増加など様々なケースがある。

そこで本研究では、不登校児童生徒の児童理解を深める為に共感的理解と受容の姿勢を持つ工夫を行う。また、学校・家庭・関係機関の連携を強化する手立てを考察・実践し、情報を丁寧に集めてアセスメントをし、効果的なプランニングから寄り添う支援を行い、支援の成果と課題を分析するモニタリングをする。そこから更にアセスメントに繋げる事で、児童生徒が不登校になった原因を究明し、改善を図ることで社会的自立を促進することができると思われる。

II 研究目標

不登校児童生徒の社会的自立に向けて、アセスメントに基づいた寄り添う支援の工夫について実践研究する。

III 研究構図

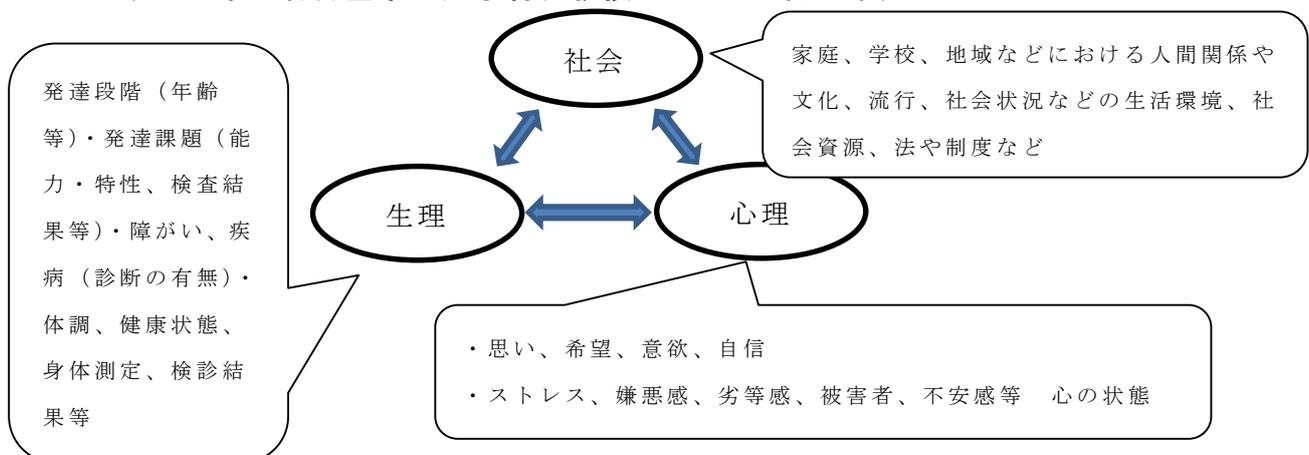


IV 研究内容

1 アセスメントについて

(1) 包括的アセスメント：見えにくい背景を見ようとするプロセス

(2018年 名古屋市立大学特任教授 SSWSV 佐々木)



人の行動には、必ず理由（原因）がある。生物心理社会モデルでは、人間の生物的側面、心理的側面、社会的側面は互いに影響しあっており、分離することはできない。したがって、原因がその3つの領域のうち一つであっても、それによって全

ての領域が影響を受ける。とされている。

(2) アセスメントシートの活用：アセスメントツールとして

子どもの生物的側面、心理的側面、社会的側面についての情報が情報を体系的に集約し整理することで、包括的に背景を見立てることができる（課題やストレス等）。としている。

(3) アセスメントにおける着眼点

①家庭生活に要因はないか

児童虐待・経済的貧困・家族の変化や喪失等・家庭内の不和・親との関係（厳格、過干渉・過保護、放任、共依存）

②学校生活に要因はないか

学習についていけない・友人との関係・教師との関係・学校や学級の状況

③心の状況に要因はないか

自信喪失や孤立感・家庭や学校への不満や反発・発達段階での不安・漠然とした不安

④発達上の特性のある子どもではないか

学校生活の中様々な場面で「困っている」

(4) 情報の意味を読み取る

①虐待の影響によるものか

②発達上の特性によるものか

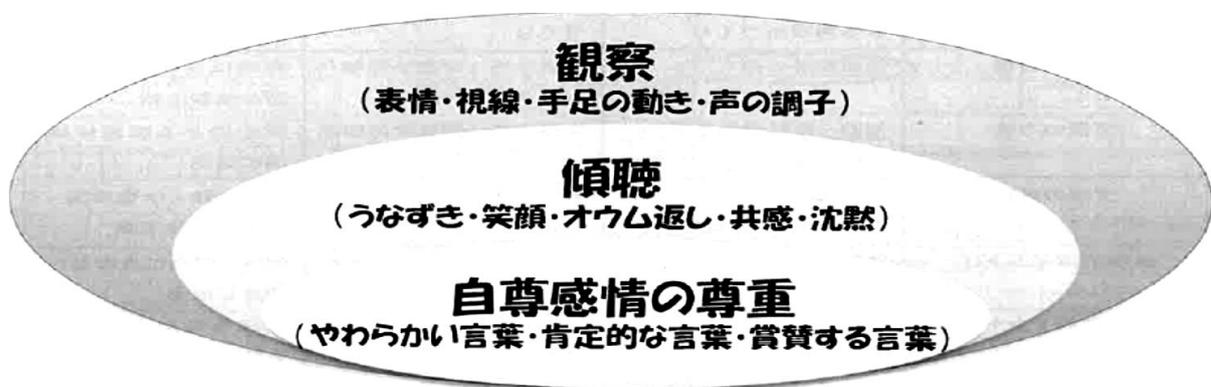
③心理的なストレスや不安・不満なのか

④状況の中にいる子どもの立場になって、保護者の立場になってイメージする

これらのことから、本研究においては、生物心理社会モデルの考え方にに基づき、児童生徒が不登校になる理由（原因）を、生物的側面、心理的側面、社会的側面から情報を体系的に集約、整理し、包括的に背景を見立て、寄り添う支援を行う研究実践をする。

2 寄り添う支援について

(1) 信頼関係の確立に向けた支援員の姿勢



①観察をする（表情、視線、手足の動き、声の調子等）。

児童生徒理解につながる情報収集

②傾聴する（うなずき・笑顔・オウム返し、共感の言葉、沈黙等）。

児童生徒の気持ちを受容

③自尊心の尊重（やわらかい言葉、肯定的な言葉、賞賛する言葉等）。

児童生徒の安心できる関係づくり

（２） ななめの関係性について



保護者・教師と児童生徒の「タテの関係」、同世代の友達と児童生徒の「ヨコの関係」ではなく、兄や姉のような「ななめの関係性」を意識する。それぞれの児童生徒に合わせて敬語と常語（タメ口）を使い分け距離感を図り、指導的な関わり方はせず提案するという関わり方をすることで、利害関係もなく、同じ視点にもなりにくい、「一歩先行く先輩」としての関係性を確立できる。安心して本音が話せる環境を作り、より幅広い価値観と生き方を知らせることができる。

（３） ケースに合わせたスモールステップ支援

☆段階的支援（通級 支援・遊び非行 系）

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
きら星学級の目標	安全で安心して通級できる居場所づくり	社会適応に向けた視点づくり	社会適応に向けた自発的な活動
支援の目標	信頼関係の確立	多種多様な体験を経験	興味に合わせた調べ学習や体験活動
支援の方法	傾聴・自尊心を傷つけない言葉・笑い	体験場所・情報量の確保	関心のある職業体験の場の確保
支援の内容	レク活動・スポーツ活動、その他の体験活動	全ての体験活動	職業体験・学習支援、その他の体験活動
支援のポイント①	笑顔で接する	様々な体験を経験させる	興味・関心に合わせた活動をしぼる
支援のポイント②	楽しさ・嬉しさ・喜びを感じさせる	活動への向き・不向きを視点に観察する	体験活動から興味のある仕事を見つけさせる
支援のポイント③	ふり返り（興味・関心に気づかせる）	本人にも活動への向き・不向きを考えさせる	仕事についてインターネット等で調べる
支援のポイント④	褒める（承認）	進路に繋がる視点を持たせる声かけ	職場見学・体験の場所の確保

☆段階的支援（通級 支援・ひきこもり 系）

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
きら星学級の目標	原因と状態の理解	接触（コンタクト）	安全で安心して通級できる居場所づくり
支援の目標	できる限りの情報収集	コミュニケーションの確立	信頼関係の確立
支援の方法	家庭・学校・関係機関との連携	多様なコンタクト法	傾聴・自尊心を傷つけない言葉・笑い
支援の内容	面談（保護者・学校・関係機関）	アウトリーチ・電話・手紙・面会、活動写真等	レク活動・スポーツ活動、その他の体験活動
支援のポイント①	信頼関係の確立（保護者・学校・関係機関）	慎重なアプローチ	笑顔で接する
支援のポイント②	原因の究明	反応ポイントの活用	楽しさ・嬉しさ・喜びを感じさせる
支援のポイント③	状態の確認	粘り強い支援	ふり返り（興味・関心に気づかせる）
支援のポイント④	興味・関心を引き出せる情報を得る（反応ポイント）	あせらない	褒める（承認）

不登校になる要因はテーマ設定理由で記述されているように多様であり、本学

級では主に「遊び非行系不登校」の支援を行うが、「ひきこもり系不登校」との支援のステップを分類する。分類する理由として、これまでのケースより「信頼関係の確立」を目指すに当たり、ひきこもり系のケースでは「他者」とのかかわるエネルギーが非行系のケースよりも低く、より慎重なステップが必要になるためである。

本研究においては、寄り添う支援の工夫として、児童生徒と接する支援員の姿勢を共通確認し、児童生徒との望ましい関係性を築くために「ななめの関係性」を意識し、多様なケースに対応できるよう、スモールステップ支援方法を実施する。また、支援の際には、アセスメントから効果的なプランニングをし、その成果と課題を分析するモニタリングを行い。それを循環させることで、より効果的な支援を行う。

V 研究実践

1 アセスメント（生物的側面、心理的側面、社会的側面についての情報収集）

（1）学校調整：アセスメントシートの活用

学校の確保している情報として、「不登校のきっかけとその後の経過」「生育暦」「不登校になる前の学校での様子」「現在の生活の様子」「好きな事や趣味」「家族の構成」「各構成員の関係性」「担任との関係性」「友人との関係性」などの聞き取りを行い整理し、効果的なプランニングに活かす。また、学校での調整をすることで、学校との連携を深めることができた。

（2）学校支援計画の活用

学校に今後の支援計画として、「学校の長期・短期目標」「学習・行動面・対人関係・生活面の具体的支援」「連携している関係機関」など記入してもらい、学校と共に今後の支援についてプランニングしていく。また、記入欄に「担任・保護者・本人のニーズ」をおくことで、担任、保護者、本人の連携を促すことができた。

（3）インタビュー（受理面接）の実施

支援をスタートするに当たって保護者、本人と心理士がインタビューを行い、「不登校のきっかけとその後の経過」「生育暦」「不登校になる前の学校での様子」「現在の生活の様子」「好きな事や趣味」「家族の構成」「各構成員の関係性」「担任との関係性」「友人との関係性」などの聞き取り、効果的なプランニングに活かす。また、相談を聞くことで保護者・本人との信頼関係を深めることができた。

（4）支援報告

支援を終えた支援員より、支援中に児童生徒の言動の中からアセスメントにつながる情報を収集し、児童生徒理解を深める。また、今後の効果的な支援についても検討できた。

（5）会議の持ち方

児童生徒が不登校になった理由（原因）を、心理士、指導主事からのアドバイスを参考に見立て、今後の効果的な支援について考察し、これまでの支援の成果と課題を分析できた。

(6) プチアセスメント

支援員同士で情報交換することで、複数の視点でアセスメントやプランニングにつながる考察が深まった。

2 寄り添う支援の工夫（アセスメント→プランニング→モニタリングの循環）

ケース（1）中学生女子（遊び非行系不登校）

【アセスメント①：学校、寄添支援員との連携から情報収集】

- ・一つ目の見立てとして、家庭環境に課題があり、毎日のように深夜徘徊や飲酒などを繰り返しており、心身の安全面のリスクが高い。
- ・二つ目の見立てとして、保護者がこれまでの行政機関や学校との関わりから、行政機関や学校に対する不信感が強く、保護者との連絡が取れなくなっていた。

【プランニング①】

- ・安全面のリスクを改善するために、本人が意欲的に取り組める活動内容を午前中に行うことで、早めの起床を促す。また、日中に活動する事で早めの就寝も促し、生活リズムの改善を図り、深夜徘徊を減らす。
- ・保護者との信頼関係の確立を目指し、本人の活動時に保護者も一緒に活動し関わる事で、学級に対する不信を和らげる。

【モニタリング①】

- ・本人の活動意欲は高く、ほとんど欠席することなく通級することができた。しかし、生活リズムの改善はみられず、深夜徘徊飲酒などは、依然として繰り返されていた。
- ・保護者の学級に対する関心が高まり、保護者との連絡が取れるようになってきた。

【アセスメント②：学校、寄添支援員、保護者、担当支援員から情報収集】

- ・担当支援員との信頼関係が構築され、本人が深夜徘徊や飲酒などを繰り返す背景には孤独感や寂しさから「誰かに話を聞いて欲しい。」というニーズが分かった。
- ・本人の話から、バイクの後部座席にも乗っている事が分かり、さらに安全面のリスクが高まった。

【プランニング②】

- ・本人のニーズに添って、深夜徘徊や飲酒などの機会を減らす為に、出来る限り本人が話をしやすい活動内容（ドライブ、宿泊体験など）を行い、傾聴・受容に努める。
- ・本人へ担当支援員より、深夜徘徊、飲酒、バイクに乗ることなどのリスクを伝え、本人自身でリスクマネジメントできるようにアドバイスをする。
- ・安全面のリスクを保護者とも共通確認するために、インテークを実施し、さらなる情報収集と連携強化を図る。また、保護者と学校職員との連携強化を目指し、交流活動も実施する。

【モニタリング②】

- ・本人の話を繰り返し、傾聴・受容をすることや、リスクマネジメントを促す事で、深夜徘徊や飲酒の減少がみられた。
- ・インテークや交流活動を実施したことで、保護者、学校、きら星の連携が深まり、本人の安全面の確保につながる環境が整ってきた。

- ・活動前には保護者と連携し迎え、活動後には学校と連携し学校へ送ることで、週に二回の登校はできた。

ケース（２）中学生男子（遊び非行系不登校）

【アセスメント①：学校、保護者との連携から情報収集】

- ・見立てとして、学校での同級生や学校職員との人間関係のトラブルから学校での人間関係が嫌になり、登校できなくなった。

【プランニング①】

- ・学校職員と信頼関係の確立を目指し、学校職員に学級に来てもらい、本人と一緒にスポーツ活動をすることで、関係性の改善を促す。

【モニタリング①】

- ・本人の活動意欲は高く、ほとんど欠席することなく通級できた。しかし、学校に対する関心は依然として低い。

【アセスメント②：学校、保護者、担当支援員から情報収集】

- ・これまでの学校生活の中で、小学校から学習に対する困り感があったことが分かった。

【プランニング②】

- ・支援内容に学習支援も実施し、学習に対する困り感を減らしつつ、学習の必要性も伝え、学習支援室「ていんぼう」への通級を提案する。
- ・学習に対する特別な配慮が必要な可能性があるため、本人、保護者に了承を得て、WISC 知能検査を実施し、結果を学校、保護者、本学級で共有する。

【モニタリング②】

- ・本人の習熟に合わせた丁寧な学習支援や学習支援室「ていんぼう」への体験通級を通して、学習の楽しさを感じ、本学級終結後「ていんぼう」への通級を決めた。
- ・知能検査結果より、学習に対する特別な配慮が必要であることが分かり、検査結果を保護者、学校、保護者、本学級で共有し、今後の対応に活かしていく確認をした。
- ・本学級終結後、本学級で共に活動した学校職員がつなぎ役となり、週に1、2回登校できた。

VI 実践を通しての考察

本研究において最も重要であったと考えるのが、アセスメントである。いかに本人に繋がる情報を、家庭、学校、関係機関から収集できるか。特に保護者との繋がりも重要であった。不登校になるきっかけとして、児童生徒がこれまでに「苦しい」「辛い」といった傷つき体験から苦しんでいる様子を、最も身近に感じているのは保護者であり、不登校になった原因究明につながる情報を保持している事が多かった。本学級では保護者との繋がりを持つため、積極的に家庭訪問や電話連絡を行い、保護者の思いに寄り添う姿勢を伝えることで、保護者との繋がりも多く持てたと考える。また、保護者との面接を実施する事で原因が生理的側面にあるのか、心理的側面にあるのか、社会的側面にあるのか、丁寧なアセスメントが行え、効果的な支援の実施に繋がったと考える。また、支援の中で、児童生徒が話す情報も重要であった。「本当は高校に通いたい。」「小学生に戻って悪いことをするなど言いたい。させたくない。」など本音を聞き出すことで、プラ

ンニングの見直しが必要であることが分かった事や、深夜徘徊、飲酒現場の具体的な様子を聞き、児童生徒のリスクの高さを確認し、家庭、学校、関係機関と連携を取り、安全を確保することもあった。より多くの情報を集め、断片的な情報を集約整理することで不登校の背景・原因を見立てることができ、社会的自立に向けた効果的な手立てを講じることができたのではないかと考える。

また、不登校児童生徒の児童生徒理解を深めるために「支援の姿勢」「ななめの関係性」を共通確認し支援の場で実践した。常に寄り添った姿勢で接することで、これまで様々な場面で傷ついてきた児童生徒は、本学級が安全で安心できる居場所だと感じ、落ち着いて活動できたと考える。その理由として実際に活動している児童生徒の生き生きとした表情やふり返りの場での「楽しかった。」「また通いたい。」「もっと続けたい。」という発言があったからである。また、スモールステップ支援を意識したことで、社会的自立に向けた段階的な視点が生まれ、支援時前半の自己肯定感を高め、児童生徒との信頼関係の構築を目指す活動から、支援時後半には社会的自立に必要な能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応力、キャリアプランニング力）を高める支援にスムーズに移行できたと考える。

Ⅶ 成果と課題

1 成果

- (1) アセスメントの際に生物心理社会モデルを意識し情報を収集することで、児童生徒が不登校になる原因を見立て、効果的な手立てを講じることができ、登校復帰や他機関への繋がりなど、社会的自立を促すことができた。
- (2) 寄り添う支援の工夫を行う事で、不登校児童生徒は安心して本学級で過ごし、「困り感」や「悩み」などを支援員に伝え、その解消に向けて共に考え、実践できた。また、支援の中から社会的自立に向け「人と上手く話せるようになりたい。」などの気づきも生まれた。

2 課題

- (1) 家庭に課題があり、保護者となかなか繋がれないケースでは、情報が不足し不登校の原因究明に至らず、社会的自立に向けた支援が滞った。
- (2) 本学級で社会的自立に向けた支援が効果的に実施され終結した後、家庭環境などの変化がみられず、徐々に元の状態に戻るがあった。

〈主な参考文献・引用文献〉

『不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）』文部科学省第770号H28年9月
那覇市教育委員会教育相談課 平成30年度 第1回不登校対策研修会
『不登校児童生徒の理解について』名古屋市立大学 特任教授 佐々木 千里